

“What is Ignatian spirituality ? ” 『イグナチオの靈性とは？』 柴田神父の私訳

David L. Fleming, SJ著 Loyola Press A Jesuit ministry出版 2008年発行

資料の目的

- ・靈的な人になるために
- ・生活と信仰、活動と観想を一致させるために
- ・一日の中で何度か神様を感じられるために

「いま自分でできることはないか？」と考えている方にダイジェストで翻訳しました。忠実な訳ではなく、わかりやすように書き加えた部分もあるのでご了承ください。

はしがき

イエズス会員とその靈性に生きる人々は、よく”行動様式(our way of proceeding)”という言葉の口にしめます。これは、一言では表しにくいイグナチオの残した特徴的な言葉です。イエズス会の創始者のイグナチオは、会憲を表すときに”行動様式”に特別関心を払いました。彼は、イエズス会員がすべきことを細かく羅列するのではなく、むしろ望ましい考え方、祈り方、行動を大事にしました。この本も同じアプローチを取っています。「イグナチオの靈性とは？」という質問に、組織的な分析より、この靈性を示す特徴的な考え方や態度を著しました。イグナチオの靈性とは、規則や信心の実践、祈る方法、献身的なわざを規則正しく守ることにこだわらりません。命のビジョン、観想的な祈り、神の理解の仕方、この世を軽く見ないでうやうやしく眺める態度、日々神を見いだせる期待、など”靈的な行動様式”です。このことを網羅的ではなく、暗示的に19の章でまとめました。

私は40年間、イグナチオの靈性について語ったり書いたり、黙想指導したり、同伴者の養成をしてきました。イグナチオの靈性を最も深く知る方法は、自叙伝にある彼の人生での出来事を知ることです。彼が、祈りの中でどのようなダイナニズムを体験したかは『靈操』に書かれています。そのため、この本でたびたび彼の生涯と『靈操』に言及しますが、それは500年近く経っても革新的な彼のアイディアをつかむためです。

この本は、イグナチオの靈性に引き込まれるだろう人、彼に関心を持ったり、もっと知りたいと望んでいる人、祈り方を知りたい人のために書かれています。イグナチオは、神がいつも私たちを招き、その愛に応えて、神と人を愛せると信じていました。この本が、その“道”を示し、神の呼びかけに寛大に応える手助けになれば幸いです。

1. A vision of life , work, and love 人生・働き・愛の3つビジョン

イグナチオの靈操には、生活のビジョン：原理と基礎（靈操番号# 23）、働きのビジョン：キリストの国（# 91～98）、愛のビジョン：愛を得るための観想（# 230～237）、の3つのビジョンがあります。それぞれは「どのようにこの世を見るか？」「どのように自分の人生を見るか？」「どのように神との関係を成長させるのか？」のビジョンを説明しています。

私たちはよく「見たら信じる」と言いますが、イグナチオは反対に「信じたらそのように見る」と言っています。私たちのビジョンがおおいに知覚を支配すると述べています。この世は邪悪で何も善いものがない、神の愛も人間の愛もない、と思えばその姿を見ることになる。反対に、この世は善にあふれ、神の愛に満ちた創造のわざが続いている、と思えばその姿を見ることになる、とイグナチオは考えました。

イグナチオの靈性は、“生活” “働き” “愛”の3つのビジョンを提供し、本当の神の姿、神が創造するこの

世界がわかるように導きます。また、神との親しさを成長させるために記されています。3つのビジョンのエッセンスは、原理と基礎（# 2 3）に描かれています。

人間は、主なる神を賛美し、敬い、仕えるために造られました。この目的に沿って生きれば、自分の靈魂は救われます。また、地上の他のものが造られたのも同じように神の愛によります。それらの賜物は、神をよりたやすく理解し、より進んで神にお返しをするためです。

こう理解すると、創造されたすべての賜物を”崇拜”の心で眺め、神の創造の業に協働できるようになります。他の造られたものを用いるのは、よい奉仕のため、人を愛し、神との関係を発展させるためです。もしも反対に、神からの賜物を濫用し自分中心に用いるなら、人を愛せなくなり、神との関係は悪くなります。（原理と基礎 # 2 3 前半部）

日々の生活では、神の創造の業を人間が造られた目的に沿って用いなければなりません。私たちは、病気よりも健康を、貧しさよりも富を、不名誉よりも名誉を、短命よりも長寿を望むことがないようにしなければなりません（不偏心・謙遜の第3段階）。なぜなら、すべてのものは、潜在的に神をより愛するための機会だからです。私たちのただ一つの願いは、私たちが造られた目的へよりよく導いてくれるものだけを望み、選ぶことです。（原理と基礎 # 2 3 後半部）

端的に表現すると、“原理”は、“造られたものはすべて神からの贈り物”、“基礎”は私たちの生き方が神に向けた贈り物”になるということです。“原理と基礎”は、神をよく知り、神によくお返ししていくためのガイドです。神は、今も、創造のなかにおられます。私たちの選択によって神を閉め出すことにもなるし、神に近づくこともできます。神は、どこか遠くにおられる方ではなく、私たちの日常に関わってくださる方

です。

“原理と基礎”は、“生活のビジョン”です。このビジョンを繰り返し黙想することが大事で、霊的生活の発展は“原理と基礎”にかかっている、イグナチオは考えていました。

イグナチオの霊性は、“働き”のビジョンも提供します。「この世での私たちの働きは何を意味するだろう？」「何のために、どう働くのだろうか？」「選ぶときにどのような価値観に基づくべきだろうか？」霊操では、これらの質問を“キリストの国”で黙想します。この黙想でキリストは、すべての人の病気、飢え、無関心、圧政、隷属から解き放つ大志を抱くリーダーとして登場します。そして、「私に従いたい者はみな、同じ食べ物、飲み物、着物で満足しなければならない。昼は私と共に働き、夜は寝ずの番などをして働かなければならない。こうして、私の労苦に与ったように、私の勝利にも与るであろう。」と、霊操を通して私たちに“働き”のビジョンを与えます。（＃ 9 3）

この“キリストの国”の黙想には、2つの特徴があります。1つ目は、何かをするためではなく、呼んでくださった方と共にいることの大切さです。2つ目は、キリストと共に働くことです。キリストは遠くから指令を出す権威者ではなく、病人を自ら癒し福音を知らせる方です。私たちにもそれに参加して欲しいと期待されています。私たちはパーソナルに呼びかけられています。神がイニシアティブをとって私たち一人一人を招いています。

3つ目は“愛”のビジョンです。とりわけ大切なのは、神は愛される方で、私たちも神を愛するように招かれている、と覚えることです。“愛を得る観想”については後述しますが、霊操の最後で黙想します。ここでは2点を短く説明します。1点目は「愛は言葉よりも行いにあると考えるべきである」（＃231） 2つ

目は「愛は両者の間の交換にある」 (#232)

神は、賜物を与えるだけではなく、賜物を通して私たちに「こうして欲しい」と語っています。

神は出し渋る方ではありません。究極にそのことを示すのは十字架と死です。まさに命を分け与えられました。同時に、イエスは自分がしていた”働き”を、私たちに分け与えられました。私たちの働きは、神を愛する”道”（イエスの生き方）を歩むことです。一人で働くのではなく、イエスから分け与えられています。イエスの愛に応えて、共に愛し、神の愛を示します。

イグナチオは「どのようにこの世を見るか?」「どのように自分の人生を見るか?」「どのように神との関係を成長させるのか?」という3つの質問に応えるように導きます。

『靈操』 ホセ・ミゲル・バラ訳 新世社 1986年

『靈操』 門脇佳吉訳 岩波文庫

『息吹をうけて 日々の生活のなかで祈りを深める』英隆一朗著 夢窓庵 第1部：原理と基礎

『祈りのはこぶね』 英隆一朗著 ドン・ボスコ社 ”祈りは感謝である” ”祈りは選ぶこと” ”祈りは望むこと”

2. God is love loving 神はそのもの愛であり愛する方

イグナチオは自叙伝の中で、「神がこの世の創造に積極的に加わる様子を神秘的に体験した」と語っています。靈操では第2週のはじめに、神の3つのペルソナが、地球を眺め、人々が地獄に堕ちるのをご覧になり、人類を救うため人間になる決心をされる場面を黙想します。 (#102)

イグナチオの靈性には、愛そのものである神がこの世に積極的に関わられる、という神理解があります。

イグナチオは1521年(30歳の時)に人生をドラマチックに変えました。それまで軍人でしたがフランス軍とのパンプローナでの闘いで脚に大けが負います。ロヨラの自宅まで搬送され、麻酔なしで激痛を伴う2度の大手術を受けます。回復を待つ何ヶ月もの間、ベッドの中で彼は人生について考えました。これまでは、軍人として手柄を立てることを夢見る虚栄心に満ちた人生を送ってきました。彼は、観察力の鋭い人間で、病床で自分の心の動きを観察しました。ベッドで読むために想像力をかき立てる恋愛小説を頼みましたが、手に入ったのはキリストの生涯と聖人伝でした。けれども、読むうちに別の意味でかき立てられるものを感じていきます。かつて読んだ恋愛小説や冒険物語を思いめぐらしますが、喜びは長続きせずむなしさが残りました。2冊の本を繰り返し読むうちに、心の中に、自分を励ます新しい神のイメージが形成されていきました。また、この喜びは持続しました。彼は、神を抽象的・哲学的な神ではなく”愛の神”として見るようになりました。神の働きは、聖書に書かれている昔の出来事ではなく、いま自分とパーソナルな関係を持ち、行動的で、寛大な”愛の神”だと感じるようになりました。神は創造し、贈り物をシャワーのように降り注ぐ方。神は行動し、その行動で神の知恵と愛を示す。神の愛は、分け隔てがない。その人がどんな人かと注文は付けない、無条件で愛する方だ。ベッドの中で、行動的に愛することが、神の際立った特徴だと悟りました。これが、イグナチオの基本的な神のイメージです。

イグナチオは、毎日の生活の出来事・人との出会いを通して、自分の体・魂・靈魂を神がどう計らって下さったかに気付くようになりました。そして、行動的に愛する神の像が、私たちの行動に深く影響するのを知ります。なぜなら、神の愛は無限に寛大で、私たちもできるかぎり寛大になるように促されるからです。人間は、神を探し求め、神からの贈り物を見つけるようになる。”原理と基礎”にも、「地上の他のも

のもまた同じように、神の愛によって創造された。それらの賜物は、神をよりたやすく理解し、より進んで神にお返しをするためである。」とあります。

神のイメージが、人生の目的に影響します。もし、私たちが、正しく歩んでいるかを採点する神のイメージを持てば、人生を苦痛な試験のように見てしまう。誤らないように、正しく行動するようになります。逆に、神は愛そのもので愛する方、と見れば、懐深く愛されながら生活し人生を成長と成熟のために送るようになります。この世のすべてのものは、神に近づく”道”になります。

この世界は、完全にはほど遠いものです。それでも神は愛し、また、人間の力を必要としています。イエスは十字架と言う苦闘の末にも、勝利・栄光があることを保証するためにこの世に來られました。

第4週の”愛を得る観想”の冒頭で、神からの贈り物を振り返ります。神がこれまでに与えて下さったものをひとつひとつ振り返ります。おん子イエスを通してすべてを与えて下さった神、ご聖体を通して今も自らを与えて下さるイエスを見ます。そして、私はどう応えるか考えます。私たちは、イエスの手となり、足となり、声となって世界を巡るよう導かれます。

神の愛は、太陽光線のようにいつまでも降り注がれます。靈操は、”愛そのものであり愛する神”に愛された私たちが、寛大に持っているものを神と人々に分かちように導きます。

参考資料 『イグナチオの足跡をたどって』 英隆一朗訳 夢窓庵 2：病の中でのふりかえり 3：新しい道の選び

『息吹をうけて 日々の生活のなかで祈りを深める』 英隆一朗著 夢窓庵 第1部：原理と基礎

『祈りのはこぶね』 英隆一朗著 ドン・ボスコ社 ”祈りは聴くこと” ”祈りは思いおこすこと”

3. A spirituality of the heart ”心”の靈性

”キリストの国”（＃ 9 1～9 8）で、イグナチオは、神からの呼びかけへの応えには2つのパターンがあると言う。1つ目は、分別のある人間として応えるもの。2つ目は、寛大な”心”で応えるもの。私たちは”心”で応えたい。

イグナチオは、靈操のはしがきで20の註”をしるし、靈操”とは何かをまず書いています。”体操”は、体を整え健康を促進するエクササイズなのに対し、”靈操”は、神の愛に、より信仰深く応えるためのエクササイズである。自己理解を深めたり意志を強くするためとは書いていない。靈的な神秘を説明するためでも、心を照らすためでもない。知的な理解が深まるイメージを持つかもしれませんが、そこに目的はありません。目的は、”心から応えること”です。

重なる部分がありますが”心”は”感情”を意味しません。”心”は内なる方向付け、人間の核になるものです。マタイ6：21で「あなたの富のあるところに、あなたの心もある」とありますが、その”心”です。また、15：19では「悪意、殺意、姦淫、みだらな行い、盗み、偽証、悪口などは、心から出てくる」ともあります。イエスはその人の”心”に何があるかを見抜いておられた。靈操では、”心”がどう反応するかが重大なポイントです。知識の吸収とは異なるし、イエスを頭で理解するのとも異なります。大事な選択の基準になるのが”心”です。”心”は、その場をつくろうレベルではなく深い望みの表れです。神により”心”を向けるよう導くのが靈操です。

イグナチオは自らそのことを体験しました。足の大怪我から回復する間に回心しますが、知的なレベルや意志のレベルより深い次元でした。回心以前からカトリックでしたが、回心によって彼の中心にある深い望み、神と人との関わり具合（コミットメント）が根本的に変わりました。宗教的实践（苦行など）や知的理解も深まりましたが、”心”こそが変容しました。

彼は、何年もの黙想の回想や、靈的指導で、人々の”心からの言葉”を聴き取れるようになりました。神が静かに語られる言葉が、神の意図を明らかにし、寛大に応えるように人々を鼓舞しているのを肌で感じました。何を信じ、何をするかも大事ですが、イグナチオは”心”のあり方により関心を持ちました。しかし、靈操でも他の黙想などでも、考え方が変わることを重視してしまいます。この本でさえ、アイディア・概念・原則がイグナチオの靈性理解を阻む原因になる危険があります。”理解”はゴール（目的）ではありません。理解できることはたくさんありますが、生き方にはさほど影響しません。”心”から反応することがゴール（目的）で、その人全体を変えます。

神は、いくつもの神秘的な体験を通してそのことを教えました。三位一体の神にどう祈ったらよいかわかりませんでしたが、ある日、3つのオルガンが同時に鳴るのを聴き、三位一体の神を体で感じました。説明はできませんが、”心”で反応しました。何度も抑えられずにむせび泣く全身の反応を経験しました。この”心の反応”が、靈操のかなめ石です。尽きない神の恵みへの人間の反応です。

「あなたはどのように生きていますか？」という問いに対し、有り余るほど与えて下さる創造主に、自由な”心”で感謝と愛の気持ちですべてをお返しするのが、イグナチオの応え方です。

『イグナチオの足跡をたどって』 英隆一朗訳 夢窓庵 26：生涯の同志となる2人の仲間 27：イグナチオとザビエル 31：靈操を授ける 35：生きた体験である靈操

『祈りのはこぶね』 英隆一朗著 ドン・ボスコ社 ”祈りは委ねである”

『道しるべ 靈的生活入門』 英隆一朗著 新世社 第2話 祈りとは何か 第3話 靈的生活の第一歩

4. A reflective spirituality 体験を振り返る祈り（究明）

霊操で、はじめに紹介されるのは”生活体験から神の現存を識別する祈り”です。イグナチオは体験を振り返る祈り”究明”を強調しましたが、彼の霊性の中でも重要な祈りです。

霊的生活のゴール（目的）は、神の方によりよく導くものを選ぶことです。これはダイナミックなゴールで、この祈りになじめば、神と共にこの世で”働く”ようになります。”究明”では、神がどう導かれたか、神の”道”が見えてくるように振り返ります。今この瞬間（人や物事との関わり、挑戦、フラストレーション、感覚などを通して）に働く神を見いだせるように祈りましょう。

霊操の”原理と基礎”で、神の創造の目的は「創造されたすべての賜物は、神をよりたやすく理解し、より進んで神にお返しをするためである」と説明しています。黙想のゴールは、神との関わりをより深めるものを選ぶようになることですが、具体的な方法が、”振り返りの祈り””日々の究明”です。けれども、”究明”は、霊操（黙想）そのものから離れるように感じる人もいます。イグナチオは、”究明”を霊操のはじめに置き、霊操の目的（心の微かな動きを感じとり、神の意志を察知してそれを選ぶため）になくてはならないものと考えました。

イグナチオは、イエズス会員たちに”究明”を習慣化させています。忙しさや病気で日々の祈り（たとえば聖書を用いての1時間の祈り）ができないときでも、昼休みと就寝前の一日に2度の”究明”は省かないように指導しました。会員たちは、決まってこの回想的な祈りをしています。これは、イグナチオが祈りの実践で定めた数少ないルールです。

”究明”には5つのポイントがあります。1）神の恵みに感謝する 2）聖霊の助けを求める 3）一日の出来事を振り返る。神がそばにおられた時、逆に離れた時がどこにあったか眺める 4）犯した罪のため

に申し訳ない心を表し、ゆるしをねがう 5) 神により役立てる自分になれるようにと恵みを願う

”究明”の仕方は、様々だが本質は同じです。日々の”究明”は、形式張った抽象的なものではなく、生活をベースにしているので地に足がついていて祈りのテーマに事欠くこともありません。私たちは、日々の生活の中で神の声を聞くことができます。神に感謝し、語りかけ、助けを求める材料は事欠きません。

5. Sin is a lack of gratitude 罪は感謝の不足

自叙伝の中で、回心したイグナチオは、これまでの人生への良心の呵責に苛まれたと書かれている。几帳面に告解を繰り返し、あがきましたが、結局は神の憐れみにすぎるしかありませんでした。この体験を通して、神の尽きない恵みの豊かさを実感し、”罪”とは忘恩だと悟ります。また、”罪”とは神への畏敬の欠如とも感じました。

何かがうまくいかなくなると、取り乱して神に背を向けてしまう。この乱れが”罪”になっていきます。キリストがこの世に来られたのは、この”罪の世界”を癒すためです。

イグナチオは”罪”と真剣に向き合ったし、私たちにもそれを望んでいます。”地獄の黙想”(# 65~72) さえするように指導しました。しかし、それは恵みの力強さを再認識するためです。彼は”罪”を神の愛のコンテキストでみていました。”罪”は感謝の欠如（忘恩）です。神が私たちになさったことへの無理解が”罪”です。

第1週では、自分たち自身、またこの世の”罪”を黙想します。彼は、”罪”を頭で理解するのではなく”心”で感じることを大事にしました。霊操で、私たちの”罪”が明らかになることを願います。

天使が神に逆らったようにすべての創造物は、神の愛を拒んだり、応えたり自由にできます。悪しき霊

は、神の愛を拒み結果として聖なる命を失うよう誘います。アダムとイヴの”原罪”に戻してしまいます。

イグナチオは、このような決定的な”罪”がいかなるものかを黙想させます。一つの選択が重大な結果をもたらしてしまいます。また、恐ろしい罪とは、罪を数えることではなく、神の愛に盲目になることだ、とも言っています。

決定的な”罪”を黙想し、自分自身の罪も黙想した後、イグナチオはイエスの十字架を自分の罪と照らし合わせて眺めさせ、3つの質問を投げかけます。「キリストのために何をして来たのか?」「何をしようとしているのか?」「何をすべきなのか?」 3つの質問は、”罪”とは何かのコンテキストからなされます。イエスの死は、私たちの”罪”の結果です。”罪”に向き合うことは、十字架のイエスと向き合うことです。神の愛から目を塞ぐことは、イエスを十字架にかけてしまうことにつながります。

霊操では「神の愛に私たちはどう応えたらいいのか?」と問います。イグナチオは、自分の罪の歴史を神の愛の光と照らし合わせて見るよう促します。たとえ、神の愛に背を向けても、神は私たちを祝福し続ける。神の愛による創造の業は続きます。このことに気づき、”心”を向け変えるのが霊操の目的です。

”崇敬(reverence)”は、イグナチオが神の名誉を示す時に好んで用いる言葉です。神は、すべてに命を与える唯一の方です。この方にどうして齒向かうことができるでしょう? 神が私たちにして下さることが本当に理解できるなら、罪など犯せるでしょうか? 神にいくら感謝してもしすぎることはないでしょう。ペトロの召し出しのように、罪人であっても神の呼びかけに応えることができます。これも、イグナチオの霊性の一つです。私たちは、まず、自分の言動を改めてから霊的成長がある、考えてしまいます。しかし、待つ必要はありません。イグナチオが、第1週で”罪””後悔”と”イエスに従う決心”とを結びつけるのはこのためです。イエスに従う途上で成長し、罪への感覚も鋭くなります。罪のゆるしを願うようになり、また人の罪もゆるすようになります。霊的に成長するのに合わせてゆるしの秘跡も受けるようになってい

きます。このことは放蕩息子（15：11～32）のたとえ話と重なります。おん父は、息子を迎えて抱きしめてゆるして下さる。また、ルカ7：36～50では、罪深い女のゆるしの場面が描かれている。旧約聖書では、売春婦は罪のシンボルでした。すべての罪は、愛をお金で売ってしまうような、ある種の濫用です。イエスに従う中で、神に申し訳なく感じ、ゆるしを願うようになる。そして、神との関係が深まり、愛し愛される能力が新たにされる。また、人をもゆるせるようになります。罪を神の愛とのつながりで受け止めていきましょう。

参考資料 『目からウロコシリーズ ゆるしの秘跡』 来住英俊 著 ドン・ボスコ社

『ゆるしの力』 幸田和生著 女子パウロ会

6. The spiritual life is a pilgrimage 靈的生活は巡礼

自叙伝の中でイグナチオは自身を”巡礼者”と呼んでいます。巡礼では、目的地はあっても途上には様々なことが待ち受けています。靈的生活は心の”巡礼”です。地図の代わりに、目的地にたどり着くための”進み方（way of proceeding）”が大事になります。

イグナチオは晩年に、側近のカマラ神父に自分の人生について短く語っていますが、自分はいかほどでもないことを知っていたので嫌々ながらでした。しかし、読み手にとっては、イグナチオの靈性が人生の中でどれだけ深かまったか知ることができます。自叙伝では、自身を”巡礼者”と呼んでいます。回心した彼は、最初、聖地を目指しました。その時代、熱心な信者は聖地への巡礼を願いました。しかし、イグナチオは広い意味、人生全体を”巡礼”と表現するようになります。それは止めどもなく長い道のりでした。そして、様々な方法を試みました。会則のミッションが定まるまでにも紆余曲折がありました。今日では、

靈的巡礼者を”探求者（seeker）”と呼びますが、当時は珍しいものでした。たいていは、固定化されたものだったからです。同じ修道院に住み続け、毎日聖務日課を唱えるのが一般でした。あるいは、フランシスコ会のように貧しく托鉢をしたり、ドミニコ会のように説教に力を入れたりしていました。イグナチオはこれらの修道会の慣習を破ります。彼の目的地は「神がよりよい方に導くことを望みそれを選ぶ」ことで、広い道幅（行動の選択肢が多岐にわたるもの）となりました。マタイ 8；20にあるように、一所留まるものではありません。聖霊の働きに敏感になり、状況に応じることを重視します。日々の生活に神がどのように現存したか、働いたかを見極める感覚を磨きました（4. A reflective spirituality ”究明”）。このような幅の広い祈り方を普及し、信徒らと互いに神との親しい体験を分かち合いました（9. Prayer is a conversation 祈りは対話）。また、想像力を使った祈りを提唱しました。（7. Pray with your imagination 想像力を使った祈り）

”巡礼”とは、イエスに従う道のりです。彼は説教をしなかったし、聖書から道徳を説くこともありませんでした。その代わりに、生活の中心にイエスを置き、イエスに従うように導きました。聖地への巡礼でイエスの足跡に口づけをするのが目的でしたが、同じ敬虔さで、神への”道”を歩むことを目指しました。霊操では、準備の祈りでイエスのことを観想しますが、祈りの間に、イエスを観て彼に聴きます。巡礼者になることは、神に導かれることを意味します。

”巡礼者”とは”その道の人”と使徒書にあります。（19：9、23、24：22）”イエスの道を歩む”人々です。当時の人たちは、その生き方でキリスト者を区別できました。イグナチオは、会憲を書く際に”道”の概念を用いました。イエズス会員はあらゆる使徒職に役立てられるように養成されます。会憲では、守るべき決まりを羅列するのではなくて、”行動の様式（イグナチオの靈性の鍵）”が書かれています。会員は独自

の”巡礼”で正しい判断ができるように育てられる。その場その場の適用性が大事になりますが、神が私たちの今の生活（巡礼）に共にいる、という理解が前提になります。あらゆる状況の”巡礼”でイエスに従えるように”行動様式”を身につけることが会員にとって重要です。

『イグナチオの足跡をたどって』 13英隆一朗訳 夢窓庵

7. God calls, we respond 神が呼びかけ私たちが応える

”キリストの国”(#91~100)で、イエスが「私に従うよう」に個人的に呼びかけていることを黙想しました。神がイニシアチブを取り、私たちが応える。この霊操のダイナニズムを振り返ります。

イグナチオの霊性では「神はいま、さらに何を私に求めているのか？」という大きな問いが何度も投げかけられます。「神が呼びかけ、私たちが応える」のが霊的生活の根本的なダイナニズムです。また、霊操の終わりで、神が限りない愛を太陽光線のように注ぐことを黙想します。しかしそれは、神の地球的なビジョンではなく、神が一人一人に働くことを意味します。霊操の大きな目的は、働いている神の恵み、神の働きに敏感になり、素早く応答し、人生を決断していくことです。たとえ弱さを感じるがあっても、そこに留まるのではなく、今働く神に応えていくことが大事です。

最初の弟子ペトロを浜辺で呼ばれた場面を思い出しましょう。全く魚が捕れなかったペトロにイエスは、「網をおろしなさい」と声をかけます。素人のイエスに言われてペトロは不満でしたがその通りにすると大漁でした。それは、イエスの「ついて来なさい」という呼びかけでした。ペトロは「私は罪深くそんな価値はありません」とすぐに断ります。でもイエスは「恐れることはない。人間をとる漁師にする。」と

ペトロを弟子に招きます。(ルカ 5 : 8～10) イエスの周りには罪人たちがいました。

イグナチオは、マタイの召し出しを引き合いに出します。ここでもイエスが「ついて来なさい」と声をかけます。マタイはすぐに決心してついていきました。「わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである。」(マタイ 9 : 9～13、マルコ 2 : 14～17、ルカ 5 : 27～32)

聖書には、イエスがその人の生活に入って弟子へとを招き、すぐについていく様子が描かれています。イエスは、ふさわしい準備(心を入れ替えるとか)をするようにとは言いません。私たちも「欠点があるから」などと固辞せずに、イエスの呼びかけにすぐに応えていきましょう。私たちの応答は時間によって育ち成熟します。応答はプロセスで、その場限りの出来事ではありません。1 コリ 3 : 2 にも、「わたしはあなた方に乳を飲ませて、固い食べ物は与えませんでした。まだ固い物を口にすることができなかったからです」と、だんだんと成長する姿が描かれています。

人生の途上で、神が呼びかけ欠点があっても応えていくことが、何度もあります。神が主導権を持ち、私たちが応えついていく「積極的能動性」。これがイグナチオの霊性の特徴です。

詩編 123 : 2 にも「ご覧下さい、僕が主人の手に目を注ぎ はしためが女主人の手に目を注ぐように 私たちは、神に、私たちの主に目を注ぎ 憐れみを待ちます」と、語られています。

「神は何をさらに求めているのか？」 この「さらに」は、一所に留まるのではなく「成長」を意味するイグナチオの特徴的な言葉です。霊操では、限りない愛をくださる神に、より応えていくダイナニズムに引き込まれていきます。

『イグナチオの足跡をたどって』 23 三人の回心者 26 生涯の同志となる2人の仲間 27 イグナチオとザビエル 32 喜びを共にする同志たち

『祈りのはこぶね』 祈りは悔い改めること、祈りは委ねである、祈りは選ぶこと、祈りは望むこと、

『道しるべ 霊的生活入門』第5話 望みについて、第7話 神に聴くこと、第19話 選びについて、第20話 (続)選びについて、第21話 選び直しについて

8. God communicate in many ways 神はあらゆる方法で私たちと交わる

自叙伝の中でイグナチオは、神の働きをどのように感じ取り始めたか書いています。それは、“心の動き”と“その日の出来事”を通してでした。これらの“気づき”によって、毎日の生活の中で「神が自分と関わっていること」を感じるようになります。

彼は、16世紀にしては珍しいほど様々なメディア（媒体）を駆使しました。恩人や友人に頻繁に手紙を書きました。会員たちにも活動の報告を求めました。観劇を好み説教にも反映させました。あらゆる手段を用いて言いたいことを伝えようとしてしました。イグナチオは「神も同じようにして人間と関わろうとしている」と確信していました。神はあらゆる手段を使って人間と交わる。祈りだけでなく、出来事、働き、日常生活、心の動きなど・・・を通して。

神の声は普段は静かで間接的です。彼は、預言者エライジャ（サムエル記上 3章）みたいになれるように、訓練によって聴き取れるよう努力しました。神の言葉を聴くには、人間の努力も大切です。私たちは、母国語でない人と会話した体験があるでしょう。その人がいくら頭脳明晰でも、ゆっくりはっきり話しかけるでしょう。それでも、わかってきているか不安です。同じことを祈りの中でしています。いつ

も話してばかりです。神に話していますが、理解してくれるか不安です。イグナチオは、いっそ話すことをやめて、代わりに聴くようにしたらいいと考えました。

神は、私たちに様々な方法で毎日語っています。霊操のごく始めにこのことを指摘しています。

“原理と基礎”（#23）で、「神は愛によって創造され、私たちはそのことに応えていく。創造されたものはすべて、神の愛に気付き、またそれに迅速に応えていく・お返ししていくためにある。」今日のテレビ番組は衛星放送含めて無数にありますが、神は創造されたものすべてを使って発信しています。

伝統的な修道生活は、決まった時間の祈り・信心・断食などの自己否定・霊的読書が中心でした。観想者は世俗から離れて神の声を聴こうとしました。しかし、それでは神と交わる方法に限られます。イグナチオは、イエスの“受肉”を強調して、神が人と交わろうとすることに注意を払いました。神は、創造の働きの中に存在して、あらゆる局面を通して私たちに語っている。第2週の“受肉”の黙想でも、抽象的・神学的に捉えるのではなく、人生の出来事を通して語る神に焦点を当てています。静かに、辛抱強く聴くことで、あらゆる手段で語りかける神を感じるようになっていきます。交わって下さる神様の声を聴いけるよう静かなときを作りましょう。

『祈りのはこぶね』 祈りは聴くこと

『道しるべ 霊的生活入門』 第8話 神に聴くこと

『イグナチオの足跡をたどって』 2.病の中でのふりかえり 16.聖地にて

33.ラ・ストルタの示現

9. Prayer is a conversation 祈り是对話

イグナチオは「祈りの中での”対話”が神と人々との間柄をあらわす」と考えました。スペイン語の

conversarは“ふるまう(a dealing with)”“ふれあう(an interacting)”

“うちとけて話す(a conversing)”を意味します。conversarは、イグナチオの祈りと使徒職へのアプローチを表現しています。

イグナチオは、靈的な旅の最初の頃から、人々をイエスとの関係に導こうとしていましたが、どのようにしたらいいか不明確でした。当初イグナチオは、ドミニコ会の説教、フランシスコ会の清貧などを手がかりにしようとしたがうまくいきませんでした。説教や講義を聴いても受け身のように感じました。そこでイグナチオは”活動的な靈性”を実践しました。そうすることで、人々がこの世界に活動的に関わることを理解しました。彼は、人生経験、神からの賜物を信徒と共有した。このシェアリングが、彼の目指す宣教方法になりました。彼は、人と交わることに長けていて互いに深くわかり合え、数多くの同士・親友を得ました。彼の靈的生活は”対話”によって発展しました。それは、祈りにおける神との”対話”に基づいています。神が自分を心にかけているように、他者にも心にかかけました。

靈的指導者の第一の役割は、靈操者が神との”対話”が深まるように導くことです。”靈操”は、イグナチオの長年にわたる神との、人との”対話”によってできあがりしました。祈りの中で、友人たちと出来事を通して”対話”しました。

祈りは、何か神秘的なもの・習い覚えるものというよりも、身近な関係(神と人々)から深まります。もし話せるなら祈れます。日常のすべて関わり・出来事の中で神を見つけるのがイグナチオの祈りです。

『イグナチオの足跡をたどって』 10.祈りと活動 15. ガエタからエルサレムへ 21.勉強の生活と彼の仲間 23.三人の回心者 25.離れてしまった最初の仲間 26.生涯の同志となる2人の仲間 27.イグナチオとザビエル 31.靈操を受ける

10. Pray with your imagination 想像力を使って祈る

霊操の中で、福音書に入るのに想像力を使った2つの方法が勧められています。この方法を教会は

“イグナチオ的観想”と呼んでいます。彼は学識は積みましたが、自分自身をインテリとは思っていませんでした。むしろ想像力の豊かさが特筆されるべきです。彼は、数々の霊的会話・霊的指導を通して、想像力が神との関係を深めることをつかみました。想像力を使った祈りがイグナチオの霊性の特徴の一つです。

イグナチオは、脚の大けがで病床にあるときに想像力を使って神との関わりを深めました。その時のノートは300ページに及び人生の宝となりました。あるときは、聖人伝から自分にできそうな崇高なことを思いめぐらしました。逆にあるときは、以前のように武勲で手柄を立てることを想像しました。この2つの想像の世界を行ったり来たりしました。しかし、騎士の生活を想像しても不満が残るのに対して、聖人のような生き方は喜びが長続きするのに気づきました。二つの間に、別の霊が働いていることにやがて気づきます。一つは悪霊から、もう一つは神からくる霊。どちらの霊から来るのか見分ける感覚が“識別”に発展します。この洞察は、想像力を用いて得られました。

聖書の読み方に関する特徴の1つ目は、第2週の“受肉の神秘”の黙想（#102）です。地球にどれほど悲劇があるかを天上から見届け、第2のペルソナが地上に舞い降りる決心をします。同じ目で、受肉したイエスは罪人や病人を深く憐れみます。混乱した世を見る神の目は、受肉以前からだったとイグナチオは想像しました。福音書に入るには、この“神の目・イエスの視点”で社会の出来事を見て感じる事が大事だと考えました。

2つ目の特徴は、想像力を使って聖書の場面に入ることでした。その場その場のシーンの傍らに入るので、聖書の場面の天気、暑さ、におい、汗がしたたる様子、人々の困窮した様子、どのようにイエスに助けを求めるのか、そしてイエスがどのように癒すかを細かく想像するようにします。イエスを体験できるように感覚(五官)を用いました。**このイエスのなさり方を自分のものにすることが“活動における観想”に導きます。**そして、次第に、実際の生き方がイエスに倣うようになっていきます。今、ここで、もう一人のイエスに私たちがなっていくのです。聖書には、イエスの人となりが見示されていますが、想像力を使うことで、傍観者ではなく、単なる知識の吸収ではなく、今いる場所で、もう一人のイエスになる。霊操は、そこを目指しました。

『目からウロコシリーズ レクチオ・デヴィナ イエスを見る祈り』 来住英俊 著 ドン・ボスコ社

『イグナチオの足跡をたどって』 2.病の中でのふりかえり 3.新しい道の選び 5.選定の確認

11. Knowing the Jesus who is poor 貧しいイエスを知る

“二つの旗”の黙想（＃136～148）でイグナチオは、人間の仇敵ルシファーが権力を笠に着るのに対し、無力で謙遜なイエスを描きます。謙遜なイエスを知ること、神のみ前で私たちはどれほど小さな者かを悟ります。

4人の福音記者はそれぞれ独自にイエスを描いています。イグナチオはフィリピ書2：6～8の謙遜なイエス像を中心に据えました。全能の神が限界のある人間の姿になる。そして何も持たずにみじめに死んでいく。おん父から有り余るものをいただきながら、イエスはそれに固執せずにすべてを手放しました。イグ

ナチオは、イエスのこの貧しさ・謙遜さに倣うように私たちを招きました。謙遜の3段階は、そのための黙想です。第1段階（＃165）は、最低限の謙遜の段階です。すべてにおいて主なる神の掟に従えるよう、できる限り身を低くして、自分を卑しくします。背けば大罪になる掟を破ろうなどとは考えもしない段階です。第2段階（＃166）は、レベルアップします。もし主なる神への奉仕、自分の靈魂が助かるために、どちらも同じように役立つならば、貧しさよりも富を、不名誉よりも名誉を、短命よりも長寿を望むのではなく、どちらにも傾かない態度を持つ段階、偏らない心、不偏心です。第3段階（＃167）は、最高の段階です。もし神の栄光と賛美を同じように望むならば、主キリストにより誠実に倣い、似た者になるのを望む段階です。貧しいキリストと共に富よりも貧しさを、侮辱されたキリストと共に名誉よりも侮辱を望み、学者・賢者とみなされるよりも愚か者・狂人とみなされたるのを望みます。イエスの実際の貧しさを望むのが最高の段階です。謙遜の段階を踏むことで、イエスのように、私たちもおん父の息子、娘となります。それによって逆説的に私たちは本当に富むことができ、その豊かさは誰も奪うことができません。

『イグナチオの足跡をたどって』 8.この世的な者を脱ぎ捨てる 9.マンレーサの苦行の生活

『道しるべ 靈的生活入門』 第24話 謙遜について

12. Sharing in the mission of Christ イエスのミッションを共有する

イグナチオは、イエスの公生活を聖書で黙想する際に、行動するイエスの姿を黙想箇所を選ぶ傾向がありました。イエスは御父から派遣されたミッションの人です。

”キリストの国”で、イエスと同じミッションに私たちが呼ばれていることを黙想します。＃91の第2の準備

にこうあります。「望んでいる恵みを願うこと。ここでは、主の呼びかけに耳を塞ぐことなく、直ちに、また熱心に、いと聖なるみ旨（ミッション）を果たせるよう、私たちの主から恵みを願う。」

このミッションへの感覚がイグナチオの霊性の重要なテーマです。イグナチオは、想像力を用いて悪に打ち克つ偉大なリーダーイエスを黙想するように勧めます。イエスをどこか遠くの、ずっと以前の人物として観るのではなく、身近で、今も働くイエスを観ることを勧めました。イエスがそれぞれの場面でどう感じ、何を話し、どう行動したかをつぶさに観ることでイエスの人となりがわかるようになります。黙想の中で立ち上がったイエスのイメージが大事です。そのイエスを手本に私たちは生活の中で信仰を生きる（活動における観想）。また、イエスとのプライベートな関係の中で、独自のミッションを生活・人生の中で見つけていきます。イグナチオの霊性は、静かに座って祈るのではなくて、自分で感じて、共に働く霊性です。イエスは一人一人に語るので、私たちはそれぞれ違うミッションを受けます。イグナチオの霊性は、一人一人の現実に着目した霊性です。

『イグナチオの足跡をたどって』 11.マンレーサ、信仰の学舎 13.バロセロナ、イタリア、聖地への旅
15.ガエタからエルサレムへ 16.聖地にて 17.ヨーロッパに戻る 23.三人の回心者 33.ラ・ストルタの
示現 34.ローマでの社会的活動

13. A way to clarify your values 価値観をはっきりさせる方法

“二つの旗”の黙想（＃136～148）で、イグナチオはイエスの価値観を示しました。信仰を証するには、何を大事にするかを口で説明するだけでは不十分で、価値観を持ち、それにそって生きることが大事です。

イグナチオは、人間の仇敵ルシファーと貧しく生きるイエスの二人の指導者を対比することで、どちらの

価値観を選ぶのか考えさせました。ルシファーは以前は天使でしたが、偽りの光を与えて人々をそそのかしました。彼は、富・名誉・プライドを使って悪への道へ誘いました。しかし、この3つが直ちにすぐに悪いとはイグナチオは考えませんでした。なぜなら、神は愛によってすべてを創造されたからです。イグナチオは、富・名誉・プライドというこの世的なものにも神の創造のわざが働いていると信じていました。すべてが神からの賜物だからです。

しかし、“神への道”を歩むには“選別”が必要になります。実際の生活では、何が善くて、何が悪いのかははっきりしないことが多いものです。単純に二者択一と言うわけにはいきません。イグナチオは、原理と基礎（#23 造られたものは神をもっと知り、受けた愛をすぐに返していくためのもの）を選択の価値観に据えました。これに対しルシファーは、巧妙にこの真実から遠ざけ、ものの力や権力に頼るように仕向けていきます。2つのうち、どちらの価値観で選ぼうとしているのか？ いま生きているのか？ 霊操で振り返ります。

『祈りのはこぶね』 祈りは選ぶこと

『道しるべ 霊的生活入門』 第19話 選びについて 第20話（続） 選びについて

『イグナチオの足跡をたどって』 2.病の中でのふりかえり 3.新しい道の選び 5.選定の確認

14. The greatest mark of God's love 神の最も偉大な愛のしるし

イグナチオは、最後の晚餐を“神の最も偉大な愛のしるし”とみなしています（#289 要点第3） 彼は、キリストのあがないのわざを理解する鍵がここにあると考えました。イエスが人々を癒す姿は第2週で黙想しますが、最も偉大な愛の働きは、“受難と死”です。そのことは、最後の晚餐で説明できます。自分の体と血を与えることが最も偉大な愛のわざだからです。“受難と死”は、あまりにも寛大な愛の表現です。

神の愛は、死さえも障害にならないことを意味しています。また、洗足の場面で、私たちがどのように人を愛し仕えるかのモデルが示されます（＃289 要点第2）

神からすべてをいただいた私たちは、人々に与えることでイエスの愛に応えていきます。

15. Seeking the grace of compassion 苦しみを共感する恵みを願う

英語のコンパッション（compassion）は、ラテン語の“苦しむ(to suffer)”と“共に(with)”の2つの意味に由来します。キリスト者のコンパッションは、他者の苦しみを共有します。

イグナチオは、コンパッションがイエスへの親しさをうむと信じていました。霊操の第2週で公生活を黙想するのは、イエスと共にいることで、イエスの共感する心を自分のものにするためです。しかし、本当にイエスの弟子になるには“受難と死”を共にすることが大切です。苦しさのさ中で、現在の私を愛してくれていることに気づくことが大切です。イエスに何もして差し上げられないけれど、受難のイエスのそばにすることが大事です。イエスの受難と死という歴史的事実は変えられませんが、苦しみと共にすることで私たちは変わることができます。そして、苦しむ人への共感、人へのゆるしにもつながります。ルカ7：37～47の罪深い女をゆるすイエス場面では、罪深さの自覚→ゆるしの嘆願→愛する行動→イエスからのゆるし→ゆるされた喜び、へと発展しています。苦しみを共にされたイエスを感じることで、私たちも他者の苦しみに立ち会い、ゆるし・励ますように変わっていきます。

『道しるべ 霊的生活入門』 第22話 苦行について

アニマ・クリスティ（キリストの魂）の祈り

16. A way to discern God's will 神の望みの識別の仕方

イグナチオは人生の重大な局面で何を選ぶかの“識別”に際して“感覚”を重視しました。彼は“活動における観想”という言葉を用いましたが、それは、神様が私たちの生活の中で働いておられることを前提にしています。出来事を通して神様は私たちに近づこうとしているし、その応答を通して私たちは神様に倣おうとしています。そのようなビジョンで日々生きていたら、出来事に直面したときにわき起こる“感覚”が何を選ぶべきかを案内してくれます。選ぶようとしていることが、「イエスに近づくのか?」「イエスから遠ざけてしまうのか?」そのような視点で選ぶようイグナチオは勧めます。

『祈りのはこぶね』 祈りは選ぶこと

『道しるべ 霊的生活入門』 第19話 選びについて 第20話 (続) 選びについて

『イグナチオの足跡をたどって』 2.病の中でのふりかえり 3.新しい道の選び 5.選定の確認

17. Working with others 他者とともに働く

“キリストの国”の黙想(#91~100)で、イグナチオは“私と共に”という言葉を強調しています。私たちはキリストと、また他者と共に働きます。霊操のさ中でも、指導者と霊操者は“協働”します。

イグナチオは、神が「生涯を捧げて欲しい」と自分に願っているの早い段階で理解しましたが、どのように実現するかがわかるには時間がかかりました。はじめは、騎士道の延長線でキリストの騎士になろうとしましたがうまくいきませんでした。エルサレムへの巡礼を目指しましたが、これも果たせませんでした。信徒の霊的生活を進歩させたいと、同伴しましたが異端の嫌疑をかけられ頓挫しました。イグナチオの司牧の変化は、哲学・神学を学んだパリ大学からです。自叙伝に「彼の周りに何人かの仲間が集まった」とあ

り、彼らが最初のイエズス会員になりました。この時点から、彼はいつも他者と働くようになります。また、イエズス会は、働く使徒職は異なっても、“協働”の霊性が形成されます。

“協働”は、霊操にも組み入れられています。霊操指導者という呼び方は実はよくありません。ヘルパーの方が適当でしょう。黙想（霊操）では、神と黙想者との関係にいつも焦点を当てますが、実はそればかりではありません。霊の動きに敏感になるように、それを解釈し助けるヘルパーとの“協働作業”です。ヘルパーは、黙想者にどんなことが起きたかよく聴き、本質的なものとそうでないものを見分けます。ヘルパーは、どこに“神の声（呼びかけ）”があるかわかるように助けます。それによって、浮き沈みのある神との関係がわかるようになる。

ミッションを果たす上での他者との“協働”も同じです。“キリストの国”で共に働くように呼ばれます。同時に、他者との“協働”にも招かれます。1 コリ12：18～21、24～26でパウロは、すべての部分がキリストの一部であると説明しています。使徒職は、キリストとの、また他者との“協働”で成り立ちます。マタイ18：20にも「二人または三人が私の名によって集まるところには、私もその中にいる」とあります。イグナチオ的奉仕は、人々の知恵と力の結集で成り立ちます。

18. Being helpful 助けるために

イグナチオは、霊操全体を通して“助けるために（to help）”という言葉強調します。“助けるために”は、謙遜に仕える人になるキーワードです。

1537年、イグナチオは同士と共にローマに向かう途中でした。まだ、どのように“仕える”か決めかねていました。最初のイエズス会員たちは、主に仕える誓願を立てましたが何をすべきか決まっていませんでした。聖地巡礼を志しましたが実現しませんでした。そこで、教皇に面会して指示を仰ぐことにした。ローマ郊外のラ・ストルタで、この問題について祈り、おん子イエスの側に置いてもらえるようにマリアに懇願した。そして、特別な神秘的なビジョンで祝福されました。おん父と、十字架を背負うイエスを見ました。おん父はイグナチオに「ローマに行くことが都合がいい」と言いました。そしておん父はイエスに「私たちに仕えるこの人（イグナチオ）を受けなさい」と言いました。イエスはイグナチオに「私たちに仕えて欲しい」と呼びかけました。

ローマでは、ラ・ストルタで得たビジョンのようにたくさんの祝福を得ました。そのビジョンは「私たちのためではなく、神の働きとしてのミッション」であることを教えました。ラ・ストルタでイグナチオは、活動的に仕えるイエスを見ていました。復活のイエスは十字架上ではなく、十字架を担いでどこかに向かっていました。同じように、私たちの愛があふれる奉仕も、時に十字架のように苦しむことにもなります。順風満帆とはいきません。

イグナチオは、神への奉仕を比喻を使って説明します。”キリストの国”の黙想(#91~100)では、復活のイエスに個人的に奉仕へと呼びかけられます。神の国の実現のためには苦労が続くことも甘受します。“二つの旗”(#136~148)では、仇敵ルシファーとイエスの2つの軍隊がぶつかる場面を黙想します。しかし、イエズス会会憲を書くにあたっては、奉仕について別のイメージ、マタイ20：1~7のぶどう園の労働者のたとえを用いています。ぶどう園は、神の国のシンボルです。そこは忙しい場所で、命・活動・成長に満ちています。神は人々の中から、植え・育て・刈り取る人を探しています。一日中、老若男女に声を

かけます。私たちにはたくさんの仕事がありますが、労働時間が長くても短くても賃金は皆同じです。しかし、苦勞があってもイエスとの親しさを深めるのが人生の目的です。ミッションとミニストリーには、高尚な意味もありますが、イグナチオは、“助けるために (to help)”の意味で用いました。彼はよく口にしますが、イエズス会員の働きは“魂を助ける”ことです。神の招きに応え、イエスと共に助けることで会員自身の魂も救われます。

誰でも助けることができます。助けることには、特別な訓練はいりません。若い人もお年寄りにもできます。日々の生活の中で、あらゆる人を助けることができます。イエズス会の働きも多岐にわたります。神が与えて下さった命を、たくさんの方で分ち助けることができます。神のそばにいるのだから、心配せずにリラックスしてできます。

『イグナチオの足跡をたどって』 22.パリの生活 23.三人の回心者 32.喜びを共にする同志たち 33.ラ・ストルタの示現 34.ローマでの社会的活動

19. Jesus is all heart イエスは私の”心”のすべて

イグナチオは、靈操の中で“心”を大事にしました。神様からの呼びかけを“a heart-felt (心で感じる)”が靈操のまとめにふさわしい言葉だと考えます。

繰り返しになりますが、イエスとの親しい交わりが、靈操の核にあります。第1週は、罪によるダメージに直面し、神の計らいで修復されるところから始まります。第2週では、世をあがなうイエスの働きに加わるように私たちが招かれます。第3週では、最後の晩餐が彼の偉大な愛のしるしとなることを黙想します。まとめになる第4週では、復活したイエスを体験し、喜び、イエスとの限りない親しさを味わいます。締めくくりの“愛を得る観想”では、太陽光線が途絶えることなく降り注ぐように、泉から水が湧くように、神

の祝福も注がれることを振り返ります。私たちの応答は、スシペの祈り（自分を捧げる祈り #235）で表現されます。

すべてを取ってください。主よ、受け入れてください。私のすべての自由、私の記憶も、知性も、意志も。私にあるものと持っているものすべてを。あなたがこれらを私に下さったのですが、主よ、あなたにお返しします。すべてはあなたのものです。どうぞ、あなたの望みのままに計ってください。あなたの愛と恵みを与えてください。私にはこの恵みだけで十分です。

親しさは何も出し渋りません。本当に親しい関係ならすべてを共有します。イグナチオは、この段階に私たちを導きます。イエスがすべてを与えたように、私たちもすべてを与えます。教会は、何世紀にもわたり、完全なコミットメント（献身）は、“heart（心）”のイメージで表してきました。何も出し渋らないイエスの“heart（心）”は、親しい私たちに向けられます。私たちはどう応えるのでしょうか？ イグナチオの靈性の中心は、イエスは私の“heart（心）”のすべて、ということです。イエスが私の“heart（心）”のすべて。これこそが、教皇にイエズス会の奉仕のあり方を仰ぎにいく途上、ラ・ストラタで見たビジョンです。そこで彼が祈っていると、十字架を担ぐイエスが現れ、「あなたは私に仕えて欲しい」と言って、持っているすべてのものをイグナチオに与えました。イエスは、イグナチオに、また、私たち皆に、自分の働き（癒しとあがないの業）に招いています。

イエスは私の“heart（心）”のすべて。17世紀に、イエスがフランスの修道女マリア・アラコックに現れ、イエスの愛とあわれみを全世界に広めるように頼みました。彼女が見たのは、イエスのみ心、です。イエスの心臓は、聖なる愛のエンブレム（表象）でした。そこから、イエスの愛が流れ出ます。“み心の信心”

の普及を助けたのは、彼女の霊的指導者であるイエズス会員のクロード・ラ・コロンビエール神父でした。

イグナチオは、ノベナも聖務日課も、他の信心の実践も霊操に組み込みませんでした。イエズス会員にも同様したが、“み心の信心”は例外で、会員たちは推進役を務めています。それは、驚くことではありません。なぜなら、“イエスのみ心への信心”は、イグナチオの霊性に統合されるからです。信心の実践は、出し渋らない愛に焦点を当てさせ、私たちも全身全霊で愛で応えるようになっていきます。イエスが私の“heart（心）”のすべて、なのですから。

ヨハネ福音書の結びで、ガリラヤ湖でイエスが弟子たちと別れを告げます。イエスは、パンを焼き、ペトロを呼んで少し話されました。イエスはペトロに3度「私を愛するか？」と尋ねました。ペトロは繰り返し「愛しています」と熱く答えます。3度も聞かれるので情けなくなりました。しかし、イエスがペトロに3度答えさせたのは、3度否んだ傷を癒すためでした。浜辺でペトロはゆるされたことを感じます。イエスは「私の羊を飼いなさい」とペトロに言って大切なことを教えます。ペトロのミッションは、人々に仕えることでした。ペトロの過去は消えませんが、誤りはゆるされました。ゆるされた愛をもって、ペトロは人々に仕えました。それは、私たちも同じです。

ヨハネ福音書のイエスのペトロへの最後の言葉「私に従いなさい」は、私たちへの言葉でもあります。イエスは、私たちに共にいるように、また、くびきを負うように招いています。くびきは、一緒に荷を引っ張るために2頭の動物を結びつける道具です。イエスは大工として、ナザレでくびき作りをしたのでしょ。くびきは、私たちとイエスとを親しく結びます。くびきによって、イエスの目指す方向と彼の力を感

じることができます。

くびきは愛です。限りない愛を注いで下さる神への寛大な応答です。霊操は、キリストとの親しい交わりに引き込み、神を愛そうという深い望み、偉大な夢をかき立てます。その夢とは、愛してくださる神のよ
うに、私たちも神を愛することです。

『イグナチオの足跡をたどって』 35.生きた体験である霊操